

第3章

休校中の学習の実態

— 休校による学びの格差にどう対応するか —

木村 治生*

第3章まとめ

- 休校期間中に出されていた宿題の量（時間）は、中学生で1時間21分、高校生で1時間51分でした。宿題の内容では、「ドリルやプリントの問題を解く」が9割以上で、もっとも多く出されていました。しかし、ICTを利用した宿題は学校によって対応が分かれ、中学校よりも高校で、公立学校よりも私立・国立学校で多く出される傾向がありました。また、高校では、大学に進学する生徒が多い高校で、ICTの利用が多く見られました。映像授業やオンライン授業などは、生徒の家庭背景が多様な公立中学校で実施するのが難しかった可能性があります。
- 宿題の返却に対しては、中学生も高校生も7割が「丁寧に見てくれた」と肯定的に評価しています。また、休校中の学習内容の理解度についても、7～8割が「理解できた」と回答しています。ただし、休校中の学習指導は、「満足できるものだった」が5割強にとどまりました。理解度や満足度は生徒の成績によって異なり、成績下位層の生徒は「理解できた」「満足できるものだった」の比率が低下します。生徒への直接的な働きかけがしにくい休校期間中は、成績下位層への対応が課題になると考えられます。
- 休校中の家庭学習は、中学生、高校生ともに「学校の教科書の予習・復習」がもっとも多くて約5割でした。また、「ICT教材」の利用が3～4割、「問題集や参考書」「学習塾教材」「通信教育教材」などの利用がそれぞれ2～3割でした。成績が上位の子どもほど、また、社会経済的地位（SES）が高い家庭の子どもほど、こうした学習教材を積極的に利用しています。

*ベネッセ教育総合研究所

1. はじめに

先行調査（ベネッセ教育総合研究所、2013）によると、中学生・高校生の平日の学校滞在時間（部活動を除く）は、約7時間30分です。このうちの7割弱にあたる5時間を、授業に費やしています。生徒たちはそれに加え、家庭や学習塾での学習を1時間30分程度行っています。休校で懸念されるのは、こうした学びの欠落です。では、休校になったとき、中学生や高校生は家庭でどのように学習に取り組んだのでしょうか。この章では、休校期間中の学習の実態について検討します。取り上げるのは、学校から課された宿題と、宿題以外の家庭学習の様子です。

宿題については、課された量（時間）や内容を確認します（2節）。そのうえで、休校中の学校の学習指導に対して生徒たちがどう評価したのかを明らかにします（3節）。休校中に学校が課した学習内容は、文部科学省が調査を行っています（文部科学省、2020）。しかし、調査対象が公立学校の設置者（自治体）であり、生徒が回答したものではありません。ここで紹介するデータは、生徒を対象にした数少ない調査の結果です。

さらに、宿題以外の家庭学習の様子についても確認します（4節）。休校中は緊急事態宣言によるステイホームが推奨され、習い事や学習塾などの校外学習にも制限がかかっていました。そうした状況下で、中学生や高校生はどのような家庭学習を行っていたのでしょうか。習い事や学習塾、通信教育やICT機器を用いた教材などの利用実態を明らかにしていきます。

そして、それらの学習が、生徒の属性によって異なるのかを考察するのが、この章の最大の目的です（5節）。休校という危機に際したとき、うまく対処できた生徒と対処できな

かった生徒がいる心配があります。また、生徒に十分な支援ができた家庭がある一方で、何もしなかった（できなかった）家庭もあるでしょう。学校は、そうした生徒や家庭による違いを問わず平等に、さまざまな学びを提供しています。ところが、学校が機能停止に陥ると、生徒による学びの格差や家庭による教育格差が広がる恐れがあります。この章では、生徒による学習の差異や家庭背景の影響などを分析することで、学びの格差が広がる可能性を検討し、その対処法を考えていきたいと思います。

2. 休校中の宿題の様子

第2章では、休校中の学習時間について、宿題以外の「家庭学習」はあまり増えていない一方で、「学校の宿題」が増えていることを示しました。子どもたちにとって学校の宿題は一定の強制力があり、どのような課題が出されるかは学習全体に重要な意味をもちます。それでは、休校期間に実際に出された宿題は、どのようなものだったのでしょうか。ここでは、宿題の様子に関するデータから、子ども自身の学習上の課題を考えるとともに、教員や保護者がとるべき対応について検討していきます。

2.1. 出された宿題の量

最初に、「休校期間中に学校から出された1日の宿題の量はどれくらいでしたか」とたずねた結果に対する回答を見てみましょう¹⁾。**【図3-1】**は、その結果です。ここからは、「出なかった」という回答が中学生、高校生ともに4%台で、少ないことが分かります。中学生と高校生を比較すると、中学生は「30分」「1時間」という回答が多く、この2つで約6割を占めます。これに対して、高校生

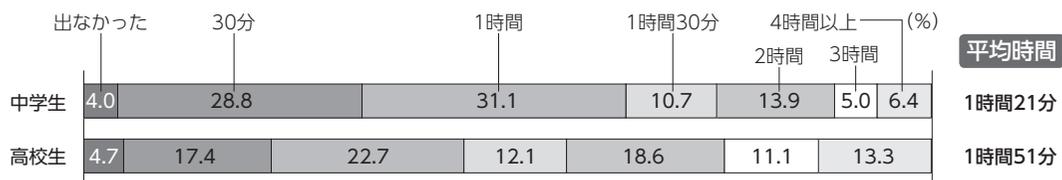
は回答が分散しています。「2時間」以上の長時間の宿題は、中学生は25.3%ですが、高校生は43.0%です。高校生の方が、長時間の宿題を課されていたケースが多かったようです。平均時間に換算すると、中学生は1時間21分、高校生は1時間51分の分量の宿題が出されていました。

この平均時間をいくつかの条件で比べてみると、興味深いことがわかります【図3-2】。まず、休校期間の長さを3区分（「短期」「中期」「長期」）で比較しても、その差はほとんど見られませんでした。休校が長引いた地域でたくさんの宿題が出たというわけではないようです。家庭でできる1日の宿題の量はある程度定まっていて、闇雲に多く出せるわけではないということなのでしょう。しかし、

このような状況では、休校期間が長いほど学習量の不足が顕著になると考えられます。

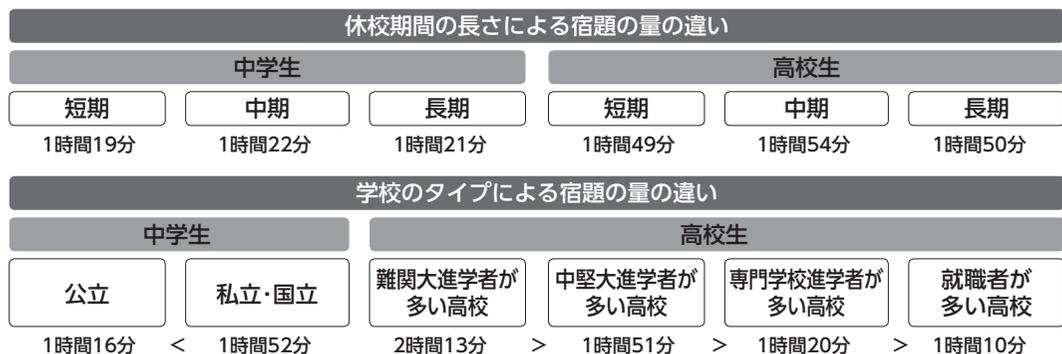
違いが表れたのは、在籍する学校のタイプによる結果です。中学生では、公立学校に在籍するか私立・国立学校に在籍するかで宿題の時間が異なっていました。前者は1時間16分、後者は1時間52分で、私立・国立の中学生は36分長いという結果です。高校生では、在籍する学校が進学校かどうかで差がありました。「就職者が多い高校」では平均して1時間10分の宿題が課されていたのに対して、「難関大進学者が多い高校」では2時間13分と2倍に近い開きがあります。このように、設置者（公私）や学校タイプの違いによって、休校で不足する学習を補うための宿題の量が異なっていたことがわかります。

図3-1 休校中の宿題の量



※棒グラフの数値は選択した比率（%）。「4時間以上」は「4時間」「5時間」「6時間」「6時間以上」の合計。
 ※質問は「出された宿題の1日の量」をたずねており、実際に費やした時間とは異なる。

図3-2 休校期間や学校タイプによる休校中の宿題の量の違い



※休校期間の長さは、「短期」が1か月以下、「中期」が2か月くらい、「長期」が3か月以上を示す。
 ※中学生の学校のタイプの「私立・国立」は、中高一貫校を含んでいる。高校生が在籍する学校タイプ（卒業生の進路）は、生徒本人の回答に基づく。

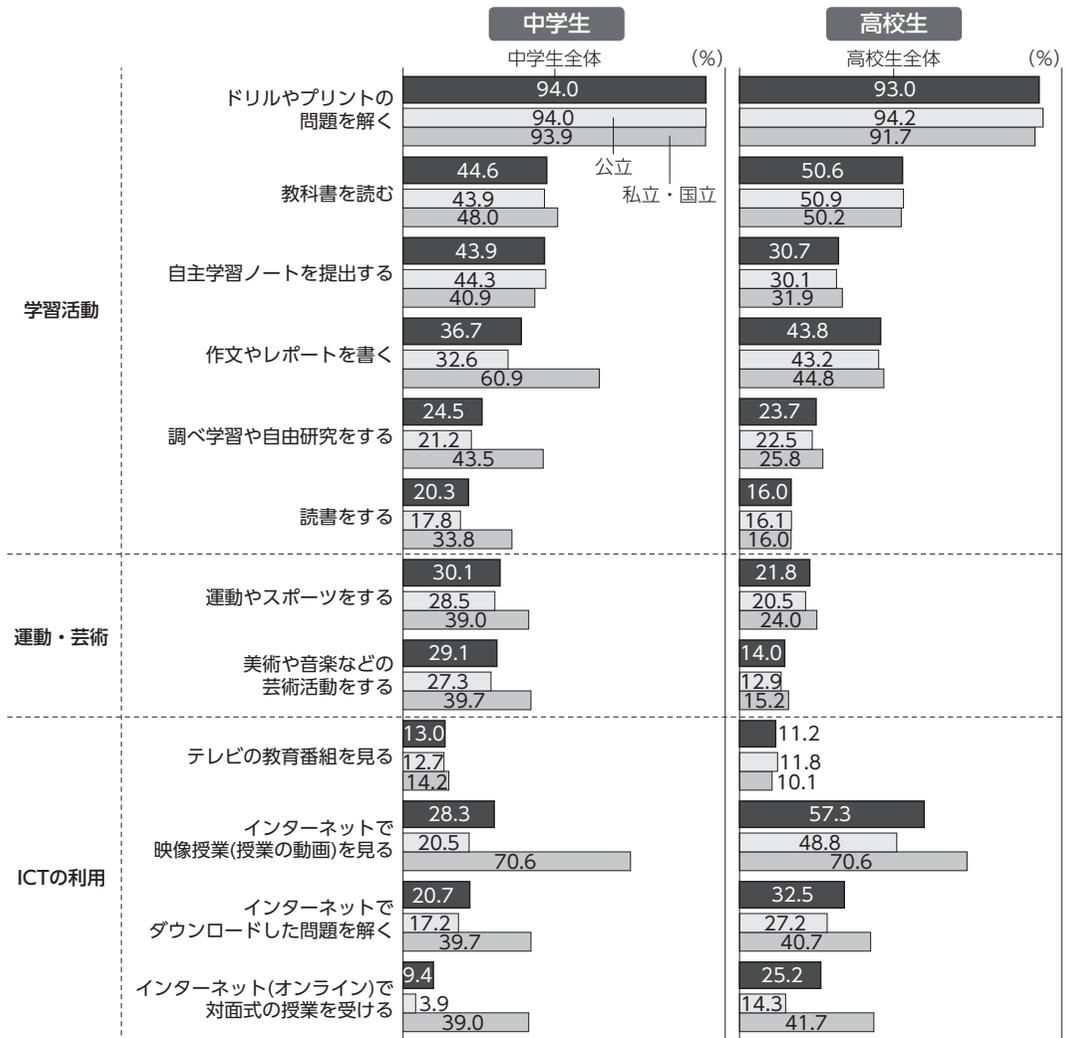
2.2. 出された宿題の内容

それでは、出された宿題の内容はどのようなものだったのでしょうか。ここでは、「休校期間中に学校から次のような宿題や課題は出ましたか」とたずねた結果を確認します。【図3-3】は、中学生と高校生のそれぞれについて、公立学校と私立・国立学校の違いを示しています。内容については、大きく「学習活動」「運動・芸術」「ICTの利用」の3つに分けてたずねてみました。この図からは、次のようなことが分かります。

1 つめは、中学生と高校生で、出された宿

題の内容に共通点と相違点があることです。共通点では、中学生全体と高校生全体の数値を比較すると、「学習活動」に大きな違いはなく、「ドリルやプリントの問題を解く」が9割を超えていて、もっとも高い割合になっています。これに対して、「作文やレポートを書く」「調べ学習や自由研究をする」「読書をする」といった宿題は、学校段階を問わず5割を下回っています。また、「運動・芸術」の項目では、中学生の数値がわずかに高くなっていますが、いずれも2～3割程度でたくさん出されていたわけではありません。中

図3-3 休校中の宿題の内容



※数値は、「たくさん出た」と「まあまあ出た」の合計比率(%)。
 ※「私立・国立」には、公立の中高一貫校を含めている。

学校でも高校でもまずはドリルやプリントなどの取り組みやすい学習が宿題として出されており、実際の学校で行われるような多様な学びを家庭で実現するのは難しかった様子が示されています。

一方で、相違点としてもっとも差が大きいのは、「ICTの利用」です。特に、「インターネットで映像授業（授業の動画）を見る」は中学生が28.3%であるのに対して高校生では57.3%と、29.0ポイントの差がありました。このほかにも、「インターネット（オンライン）で対面式の授業を受ける」は15.8ポイント、「インターネットでダウンロードした問題を解く」は11.8ポイント、高校生の方が「出た」と回答しています。**中学校では、ICTを活用することが即座にはできなかった学校が多かった**ことが分かります。

この「ICTの利用」の違いは、公立学校と私立・国立学校の間にも顕著に出ています。2つめに指摘できるのは、「公私格差」です。たとえば、「インターネットで映像授業（授業の動画）を見る」は、私立・国立の中学校と高校が7割を超えるのに対して、公立中学校は2割、公立高校は5割弱にとどまります。「インターネット（オンライン）で対面式の授業を受ける」も同様に、私立・国立の中学校と高校は4割ですが、公立中学校は1割に満たず、公立高校でも1割強しか実現でき

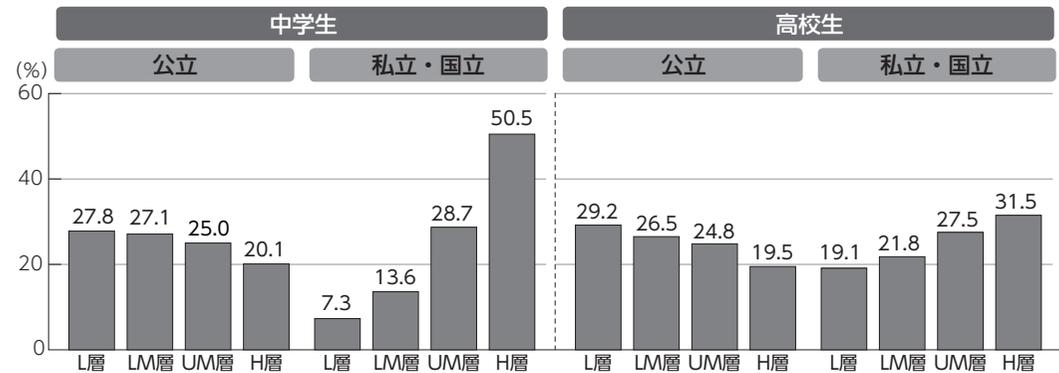
ていません。**生徒の家庭背景が多様な公立学校では、ICTを利用する宿題がなかなか出せなかった様子**がうかがえます。そのほかにも、中学生では「作文やレポートを書く」「調べ学習や自由研究をする」「読書をする」などの項目で、公立学校と私立・国立学校の違いが出ています。

ちなみに、宿題の量や内容は、生徒の成績による違いがありません。これは、学校の宿題が成績を問わずに一律に出されているためだと考えられます。ただし、高校については、学校のタイプによる違いが表れていました。特に、ICTを利用した宿題は、「就職や就職希望者」や「専修・専門学校への進学者」が多い高校よりも、「中堅レベルの大学への進学者」や「国公立大学や難関大学への進学者」が多い高校で出される傾向にありました。**高校では、進学校ほどこうしたICTを利用する指導が進んでいる**と考えられます。

2.3. 家庭背景と宿題の関連

公立学校に通う生徒は、家庭の背景が多様であることについて触れました。そのことは、この調査のデータでも分かります。第1章で説明した社会経済的地位（SES）を公立学校と私立・国立学校と比べてみると、【図3-4】のようになります。L層は世帯収入や保護者の学歴や職業威信などがもっとも低い

図3-4 社会経済的地位（公立と私立・国立の違い）



※ L層は Lowest SES、LM層は Lower middle SES、UM層は Upper middle SES、H層は Highest SES の略。

層、H層は逆にもっとも高い層で、学年ごとに各層が4分の1ずつになるように調整しています。これを見ると、公立学校にはL層からH層まで幅広い家庭の生徒が通っているのに対して、私立・国立学校はH層の出現率が高く、とりわけ中学校にその傾向が強いことが示されています。

ところで、私立・国立学校に在籍する生徒の家庭背景に偏りがあることは、休校中の宿題の実施とどのような関連があるのでしょうか。公立学校と私立・国立学校の差が大きい「インターネットで映像授業（授業の動画）を見る」（映像授業の宿題）について、中学生の結果をSES別に見てみたいと思います。**【表3-1】**をご覧ください。

中学生全体の行を見ると、映像授業の宿題はH層の生徒に多く出されていたことが分かります。しかし、公私別の公立の行を見ると、SESによって出された宿題の比率に違いはありません。同様に、私立・国立の行も、SESによる有意な違いはありませんでした。各学校は、生徒の家庭的な背景によって宿題を出し分けることはしていないということでしょう。とはいえ、公立学校と私立・国立学校に大きな差があるのは、前述した通りです。結局のところ、中学生全体の行に表れたSESによる映像授業の宿題の違いは、階層が高いほど私立・国立学校に通う割合が高くなることから生じています。後述するように学習の取り組みはSESによって異なりますが、その一部は在籍する学校を經由して生成されている可能性があります。

3. 休校中の学習指導に対する評価

ここまで、休校中に学校から出された宿題の量と内容を概観してきました。次に、そうした宿題に対して教員がどれくらい丁寧に対応したのか、生徒は学習内容をどの程度理解し、学校の指導にどれくらい満足したのかを確認していききたいと思います。当の生徒は、休校中の学校（教員）の学習指導をどう評価しているのでしょうか。

3.1. 教員の対応

2020年3月2日に全国で一斉に行われた休校は、十分な準備が整わないままに実施されました。それぞれの学校や教員は、生徒の学習をどう保障するかに悩み、試行錯誤を続けてきたと思いますが、学校（教員）の指導が生徒に十分に届いていたのかが心配です。そこで、調査では、提出した課題について、「先生からの返却（採点や解説、コメントなど）は、どれくらい丁寧に見てくれましたか」とたずねました。その結果が、**【図3-5】**です。

これを見ると、「とても丁寧に見てくれた」と感じている生徒は中学生、高校生ともに1割台と少ないですが、「まあ丁寧に見てくれた」という回答が半数を超え、7割が肯定的に評価しています。その一方で、約3割が「丁寧に見てくれなかった」と答えています。これを多いと見るか少ないと見るかは、判断が分かれるところかもしれません。

興味深いのは、肯定7：否定3の割合につ

表3-1 映像授業の宿題（中学生）

| | SES全体 (%) | SES別 (%) | | | | χ二乗検定 | |
|-------|-----------|----------|------|------|------|-------|------|
| | | L層 | LM層 | UM層 | H層 | | |
| 中学生全体 | 28.3 | 21.8 | 22.7 | 28.7 | 39.7 | *** | |
| 公私別 | 公立 | 20.5 | 19.8 | 18.8 | 20.9 | 23.6 | n.s. |
| | 私立・国立 | 70.6 | 63.6 | 65.1 | 67.0 | 75.0 | n.s. |

*** $p < .001$. n.s. は有意差なし。

いて、生徒の成績による偏りが小さいことです。成績上位層も下位層も同様に、7割が「丁寧に見てくれた」と回答しています。ただし、公立学校と私立・国立学校では違いが見られ、私立・国立に在籍する生徒の方が1割ほど「丁寧に見てくれた」の割合が高くなっています。これらは、中学生も高校生も同じ傾向でした。

3.2. 休校中の学習内容の理解度

続いて、休校中の学習内容の理解度です。「休校期間中に学習した内容は、どれくらい理解できましたか」という質問に対する回答を、【図3-6】に示しました。これを見ると、「十分に理解できた」と「だいたい理解できた」の合計は、中学生全体で8割、高校生全体で7割です。多くの生徒が「理解できた」と感じているようですが、このデータでも「理解できなかった」と回答している残りの生徒が

気がかりです。

さらに、理解度については成績により差があります。「理解できた」と回答した比率は、中学生では上位層が93.8%であるのに対して、下位層は62.1%でした。高校生も上位層は84.4%ですが、下位層は52.6%です。いずれの学校段階でも、30ポイント以上の開きがありました。学習内容の理解度をたずねれば、休校中の宿題に限らず通常の授業でも、成績下位層が低くなることは想像できます。とはいえ、通常の授業では教員が生徒の学習状況を見取り、直接フォローすることが可能です。休校中はそうした直接的な支援がしにくく、理解できなかったところが放置される可能性があります。学校の指導がなかなか行き届かない環境では、学力が低い子どもたちに対して、より細やかな配慮が必要だと考えられます。

図3-5 先生からの返却の丁寧さ

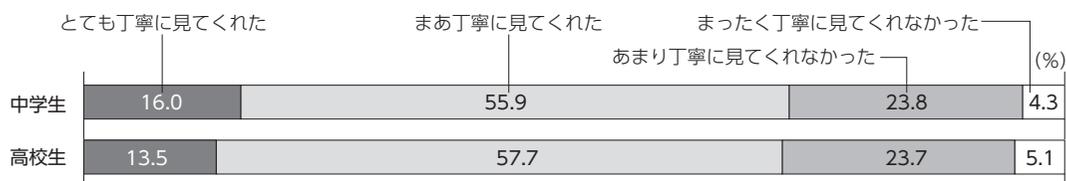
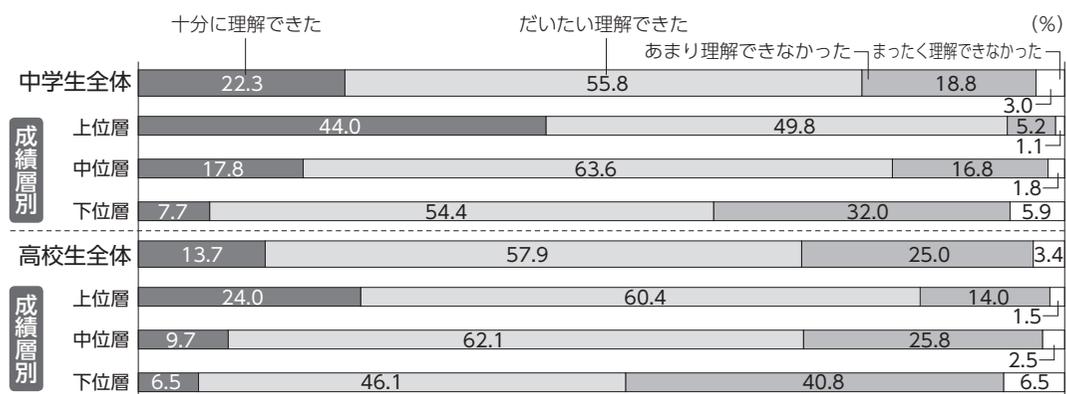


図3-6 休校中の学習内容の理解度



*成績は、国語、数学、社会、理科、英語の5教科についての自己評価を合計して、上位層、中位層、下位層が3分の1ずつになるようにグループ化した。

3.3. 休校中の学習指導の満足度

それでは、総合的に判断したときの学校の指導に対する満足度はどうだったのでしょうか。こちらは、少し厳しい結果になりました。**【図3-7】**を見ると、「満足できるものだった」という回答は、「とても」と「まあ」を合わせて中学生全体で54.3%、高校生全体で54.5%となり、かろうじて半数は超えました。しかし、4割を超える生徒は、「満足できるものではなかった」と答えています。そして、成績が下がるほどそのように感じた生徒が多いことが、図から分かります。成績下位層では、中学生も高校生も、「満足できるものではなかった」という回答が半数を超える結果になりました。

先に見たように、宿題の内容はドリルやプリントが中心で、先生たちはある程度は丁寧に採点や解説、コメントなどを返したようです。しかし、生徒の評価は満足と不満が分かれる結果でした。やはり、学習指導が十分に行き届かなかった生徒が、一定の割合で存在していたことをうかがわせます。

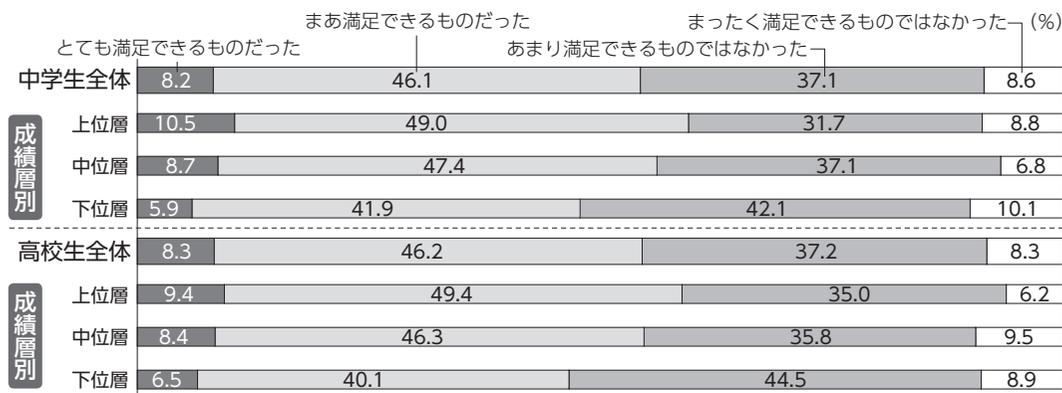
ちなみに、この満足度を規定する要因がどのようなものかを重回帰分析という手法を使って調べたところ（図表省略）、課題に対する先生からの返却の丁寧さがもっとも強く影響していました。やはり、生徒にとっては

学習指導を担当してくれている先生の対応が、大きな意味を持っています。これに対して、宿題の量（時間）は満足度に影響はしていませんでした。量が多いことや少ないことで、満足度が左右されるといったことはなかったようです。宿題の内容面で見ると、「ドリルやプリントの問題を解く」「教科書を読む」といった学習は満足度に影響していない一方で、学校現場でも対応が分かれた「インターネットで映像授業（授業の動画）を見る」といった内容の宿題が、満足度にプラスの効果を示しました。生徒の満足という観点から見ると、ドリルやプリントや教科書の課題をこなす学習を課すだけでなく、ICTを活用するような一歩踏み込んだ指導が必要だと言えそうです。

4. 休校中の家庭学習の様子

ここからは、学校から課された宿題以外の家庭学習の様子や、習い事・学習塾の状況について検討します。休校になったとき、子どもたちはどのような学習を行っていたのか、習い事や学習塾にどのような影響があったのかを見ていきたいと思えます。

図3-7 休校中の学習指導の満足度



4.1. 休校中の習い事・学習塾の状況

コロナ禍は、習い事や学習塾などの事業者にも、少なからぬ影響を与えました。経済産業省は2020年4月10日に『『新型コロナウイルス感染症緊急事態宣言』及び『新型コロナウイルス感染症対策の基本対処方針』に対応した、学習支援事業における感染症対策の徹底について』と題する要請を発出しました。この中には、事業者に対して、都道府県知事から施設の使用制限の要請があった場合に速やかに従うこと、オンライン授業を積極的に取り入れることなどが記載されています。実際に34の都道府県では、1,000平方メートルを超える床面積の学習塾や教室に対して施設利用を停止する要請が行われました²⁾。こうした動きもあり、大手の学習塾では、休業したりオンライン授業に切り替えたりするところが多く出ました。また、習い事を行うための施設、たとえば体育館やプール、集会場や多目的ホールなども多くが使用停止になりました。一方で、休業の対象にならなかった事業者も多く、感染対策を十分に行ったうえで、活動を継続したところもあったと考えられます。

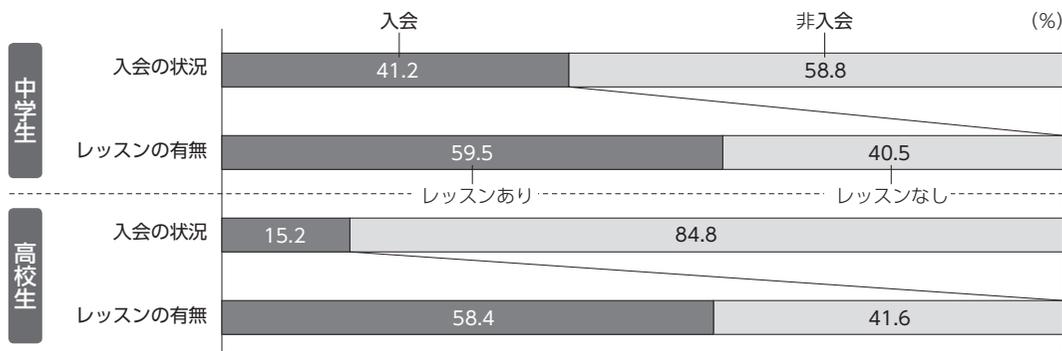
それでは、実際に子どもたちは、休校中に習い事や学習塾を続けられていたのでしょうか。データで確認してみましょう。【図3-8】

は、休校中の習い事の実施状況を示しています。入会の状況は、「休校期間中に習い事やスポーツクラブに入会していましたか」とたずねた結果です。「入会」していると答えたのは、中学生41.2%、高校生15.2%で、中学生の方が学校外での習い事が盛んなことが分かります。レッスンの有無は、その「入会」していると答えた生徒に限定して、「休校期間中にレッスンがどれくらいありましたか（オンラインレッスンも含む）」をたずねました。中学生では59.5%、高校生では58.4%という結果でした。

習い事はすべての生徒が行っているわけではありませんが、入会していた場合、中学生も高校生も**約4割の生徒の活動が中止**になったようです。**コロナ禍は、こうした学校外の活動のしにくさを生んでいた**ことがわかります。

次に、学習塾の状況を見てみましょう【図3-9】。「休校期間中に学習塾や予備校に入会していましたか」という質問には、中学生の41.5%、高校生の26.1%が「入会」していたと回答しています。ここでも、中学生の通塾率が高いことが分かります。授業の有無は、その生徒たちに、「休校期間中に授業がどれくらいありましたか（オンライン授業も含む）」とたずねた結果です。中学生では

図3-8 休校中の習い事の状況



※レッスンの有無は、1週間あたりの活動日数をたずねた項目から作成。「レッスンはなかった（中止になった）」を「レッスンなし」、「週に1日より少ない」から「週に7日（毎日）」までの回答を「レッスンあり」とした。

82.6%、高校生では79.5%が「授業あり」でした。約8割は授業を受けることができていたようです。学習塾が業界全体で感染予防のガイドラインを徹底したり、オンライン授業に切り替えたりしたことで、マイナスの影響を小さくすることができたのかもしれませんが。それでも、約2割は授業が中止になったと答えていて、まったく影響がなかったとは言えない状況も示されています。

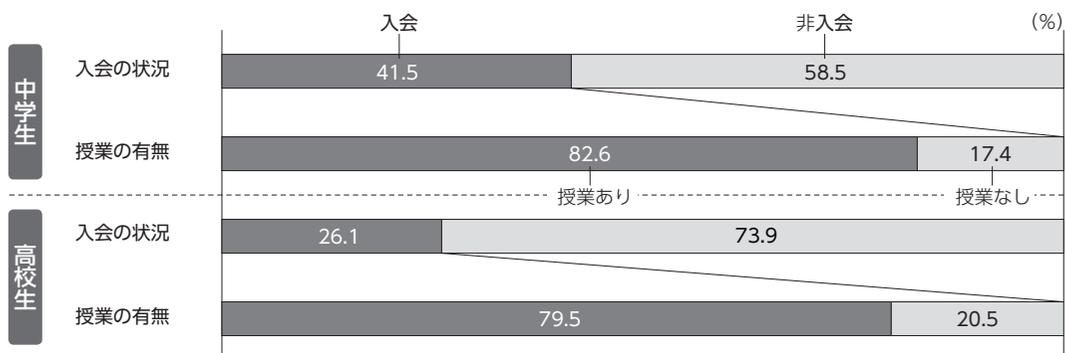
4.2. 休校中の家庭学習

これまで述べてきたように、休校中は学校や習い事、学習塾といった家庭の外での学習活動は制限されていました。そのようなステイホームの環境の中で、生徒たちは家庭内で

はどのような学習を行っていたのでしょうか。第2章で見たように、宿題以外の家庭学習（学習塾を除く）の平均時間は、中学生で44分、高校生で55分でした。本項では、「休校期間中に、学校から出た宿題以外に、家庭で次のような教材を使った学習を行いましたか」という質問から、休校中の家庭学習の具体的な内容を確認していきます。

【表3-2】は、「よく行った」と「ときどき行った」の合計の数値を示しています。ここからは、中学生も高校生も、「学校の教科書の予習・復習」をもっとも多く行っていたことがわかります。約半数が、学校の宿題以外にも教科書を教材にして学習に取り組んでいました。次に、「書店やインターネットで

図3-9 休校中の学習塾の状況



※授業の有無は、1週間あたりの授業日数をたずねた項目から作成。「授業はなかった（中止になった）」を「授業なし」、「週に1日より少ない」から「週に7日（毎日）」までの回答を「授業あり」とした。

表3-2 休校中の家庭学習

| | 中学生 | 高校生 |
|----------------------------|------|------|
| 学校の教科書の予習・復習 | 49.3 | 48.7 |
| 書店やインターネットで購入した紙の問題集や参考書 | 26.9 | 29.0 |
| 学習塾教材（下の3項目のうち1つでも「行った」者） | 33.3 | 20.1 |
| 学習塾の紙の教材（プリントや問題集など） | 29.3 | 15.9 |
| 学習塾の映像授業 | 18.0 | 12.5 |
| 学習塾のオンラインでの対面授業 | 17.4 | 7.0 |
| 通信教育教材（下の4項目のうち1つでも「行った」者） | 29.5 | 18.3 |
| 通信教育の紙の教材 | 17.1 | 11.2 |
| 通信教育のタブレットの教材 | 17.7 | 8.0 |
| 通信教育の映像授業 | 12.4 | 11.2 |
| 通信教育のオンラインでの対面授業 | 5.9 | 6.2 |
| ICT教材（下の3項目のうち1つでも「行った」者） | 32.6 | 40.6 |
| インターネットでダウンロードしたプリント教材 | 14.5 | 13.6 |
| インターネットの映像授業 | 20.1 | 29.5 |
| スマートフォンやタブレットの学習アプリ | 17.6 | 27.3 |

※「よく行った」と「ときどき行った」の合計比率（%）。

購入した紙の問題集や参考書」「学習塾教材」「通信教育教材」などの有料の教材ですが、これらには2～3割の生徒が取り組んでいます。「学習塾教材」と「通信教育教材」は中学生の利用が1割ほど高くなっています。最後に、「ICT教材」ですが、これは無料の教材も多いと考えられます。ICT教材は、コロナ禍になる前から多様なコンテンツが配信されていました。学校が休校してからは、それに加えてさまざまな民間事業者が学習用のコンテンツを開放したり、学校がそれらの利用を推奨したりしました。そうしたことが促進要因になったのか、中学生で3割、高校生で4割が利用しています。ステイホームは、このようなICTメディアを用いた学習教材の利用を進めたと言えるかもしれません。

4.3. 成績による家庭学習の違い

このような家庭学習は、成績によって異なるのでしょうか。それを確かめるために、成績層別に比率を算出したのが【表3-3】です。高校生については、学校タイプ（卒業生の主な進路）による違いも見てみました。こ

こからは、成績が上位の生徒ほど、さまざまな学習に取り組んでいることが分かります。

中学生では、「学校の教科書の予習・復習」が成績上位層58.1%に対して、成績下位層は38.8%と19.3ポイントの開きがあります。このほか、「書店やインターネットで購入した紙の問題集や参考書」は13.9ポイント、「学習塾教材」は12.1ポイント、「通信教育教材」は11.7ポイント、「ICT教材」は13.3ポイント、成績下位層よりも上位層の方が多く結果になりました。

一方で、高校生は、中学生に比べると成績層別の違いは大きくありません。それに代わって、在籍する学校のタイプによる違いが大きく表れています。たとえば、「学校の教科書の予習・復習」は、難関大進学者が多い高校の生徒では60.8%が行っていましたが、就職する卒業生が多い高校の生徒は29.1%と半数にも満たないことが分かります。他の家庭学習でも、同様の違いが見られます。

ここで示した成績上位層ほど家庭学習に熱心である傾向は、休校中ではない通常の際にも表れます。そのことは、本調査で毎年行っ

表3-3 休校中の家庭学習（成績層別、学校タイプ別）

| | 中学生（成績層別） | | | | 高校生（成績層別） | | | |
|--------------------------|-----------|------|------|--------------|-----------|------|------|--------------|
| | 上位層 | 中位層 | 下位層 | χ^2 乗検定 | 上位層 | 中位層 | 下位層 | χ^2 乗検定 |
| 学校の教科書の予習・復習 | 58.1 | 51.0 | 38.8 | *** | 52.7 | 50.3 | 43.2 | *** |
| 書店やインターネットで購入した紙の問題集や参考書 | 34.2 | 26.3 | 20.3 | *** | 35.0 | 30.0 | 20.2 | *** |
| 学習塾教材（3項目のうち1つでも「行った」者） | 37.8 | 38.6 | 25.7 | *** | 20.4 | 21.5 | 17.6 | |
| 通信教育教材（4項目のうち1つでも「行った」者） | 35.1 | 31.4 | 23.4 | *** | 19.1 | 19.8 | 17.1 | |
| ICT教材（3項目のうち1つでも「行った」者） | 40.1 | 30.8 | 26.8 | *** | 40.6 | 43.8 | 35.7 | * |

| | 高校生（学校タイプ：進路別） | | | | |
|--------------------------|----------------|------|------|------|--------------|
| | 難関大 | 中堅大 | 専門学校 | 就職 | χ^2 乗検定 |
| 学校の教科書の予習・復習 | 60.8 | 47.2 | 30.9 | 29.1 | *** |
| 書店やインターネットで購入した紙の問題集や参考書 | 40.4 | 26.5 | 19.1 | 12.6 | *** |
| 学習塾教材（3項目のうち1つでも「行った」者） | 30.2 | 18.6 | 4.6 | 3.8 | *** |
| 通信教育教材（4項目のうち1つでも「行った」者） | 22.1 | 19.3 | 10.5 | 8.2 | *** |
| ICT教材（3項目のうち1つでも「行った」者） | 48.3 | 41.9 | 25.0 | 23.1 | *** |

※数値は、表3-2と同様。「よく行った」と「ときどき行った」の合計比率（%）。

※*** $p < .001$ 、* $p < .05$ 。

※高校生の学校タイプは、「どのような進路に進む卒業生が多いか」をたずねた結果で分類した。「難関大」は「国公立大学や難関大学への進学者」、「中堅大」は「中堅レベルの大学への進学者」、「専門学校」は「専修・専門学校への進学者」、「就職」は「就職や就職希望者」が多い高校に在籍していることを示す。

ているベースサーベイからも明らかです³⁾。また、高校の学校タイプによる学習行動の違いは、生徒文化の研究として長く蓄積されていますが、進学校の生徒ほど家庭学習に積極的です⁴⁾。このように、学校の成績や在籍する学校のタイプによって家庭学習の状況が異なることは、通常の時期にもあることでしょう。しかしながら、休校中はそうした家庭学習の差異を、学校での学びで埋めることができません。教員の目が届きにくい環境の中で、学力が振るわない生徒や学習意欲が低い生徒をどう指導するのか、大きな課題と言えそうです。

4.4. 家庭背景と家庭学習の関連

休校中にいっそうの配慮が必要なのは、成績下位層の生徒だけではありません。家庭背景が恵まれない生徒に対しても十分なケアを行わないと、通常の時期に存在する格差をさらに広げてしまう懸念があります（木村，2021）。

【表3-4】は、休校中の宿題以外の家庭学習について、社会経済的地位（SES）別に数値を算出しました。これを見ると、おおむねSESが高い層の生徒の方が、さまざまな家庭学習を行っていることが分かります。中学生と高校生で差がある項目に多少の違いはありますが、「学校の教科書の予習・復習」と「学習塾教材」はいずれの学校段階でも有意な違いが見られました。コロナ禍のような想定

外の事態において、家庭の資源に恵まれた生徒はさまざまな学習教材をうまく活用し、不足する学習を補填していた可能性があります。

「2.3. 家庭背景と宿題の関連」の項で述べた通り、学校の宿題は公立学校の中ではSESによる違いがありませんでした。これは学校の宿題が、家庭背景を考慮して出されているわけではないからです。しかし、宿題以外の家庭学習では、家庭のSESによる違いがダイレクトに表れます。SESが高い層の子どもの方が学習に積極的に取り組むことは、通常の時期も同様です（木村，2020b）。しかし、休校の状況になると、そうした格差を是正するような学校の機能を発揮することができません。休校のように学校の機能が低下したときに（たとえば、夏休みなどの長期休業も同様のことが考えられる）、SESが低い家庭の生徒の学習をどう支えるかも大きな課題です。

5. おわりに

この章では、休校中の中学生・高校生の学習の実態を検討してきました。学校がなくなったら生徒たちの学びがどうなるのか——それは、学校が持つ役割や機能を明らかにすることにつながると感じます。そのような視点で、今回のデータから分かることを整理していきましょう。

表3-4 休校中の家庭学習（SES別）

| | 中学生 (SES 別) | | | | | 高校生 (SES 別) | | | | |
|---------------------------|-------------|------|------|------|--------------------|-------------|------|------|------|--------------------|
| | L層 | LM層 | UM層 | H層 | χ ² 乗検定 | L層 | LM層 | UM層 | H層 | χ ² 乗検定 |
| 学校の教科書の予習・復習 | 42.7 | 46.4 | 50.6 | 56.8 | *** | 41.0 | 46.7 | 50.8 | 56.7 | *** |
| 書店やインターネットで購入した紙の問題集や参考書 | 24.6 | 24.5 | 26.8 | 31.0 | | 22.6 | 24.2 | 28.9 | 42.0 | *** |
| 学習塾教材 (3項目のうち1つでも「行った」者) | 25.4 | 31.8 | 39.8 | 36.3 | *** | 10.9 | 15.2 | 23.4 | 30.9 | *** |
| 通信教育教材 (4項目のうち1つでも「行った」者) | 25.0 | 30.1 | 31.2 | 32.3 | * | 16.2 | 18.4 | 18.6 | 20.6 | |
| ICT教材 (3項目のうち1つでも「行った」者) | 23.5 | 29.2 | 31.7 | 44.1 | *** | 38.1 | 40.9 | 40.0 | 46.1 | |

※数値は、表3-2と同様。「よく行った」と「ときどき行った」の合計比率(%)。

※*** $p < .001$ 、* $p < .05$ 。

5.1. 結果のまとめ

休校中の学習の状況についてまとめると、以下の5点に集約できます。

①休校期間中に出されていた宿題の量（時間）の平均は、中学生で1時間21分、高校生で1時間51分でした。通常の時期であれば、学校の授業は5時間程度あるので、休校期間が長引くほど学習量が不足するのは明らかです。

②その宿題もドリルやプリント学習が中心で、体験的に学んだり、友だちと学び合ったりすることは困難だったと考えられます。オンラインで対面授業を受けるような課題は、高校生では25%程度が課されていましたが、中学生は10%に満たない状況でした。双方向型の学びの実現は難しかったと考えられます。

③そうした宿題について、7～8割の生徒は教員が丁寧に見てくれた、内容が理解できたという肯定的な反応を示しています。しかし、学習指導全般については中学生、高校生ともに約45%が、「満足できるものではなかった」と回答しています。否定的な回答は、学業成績が低い層に多い傾向がありました。

④習い事に通っている者の約4割、学習塾に通っている者の約2割が、レッスンや授業が休みになったと回答しています。コロナ禍は、こうした学校外での学びに制限がかかる状況を生みました。

⑤休校中の家庭学習は「学校の教科書の予習・復習」が5割弱でもっとも多く、「ICT教材」の利用が3～4割、「問題集や参考書」「学習塾教材」「通信教育教材」などの利用はそれぞれ2～3割でした。ICT教材がそれ以外の教材を上回っていて、コロナ禍やそれに伴う休校は、ICTを活用する学びを広める効果を持ったと考えられます。

5.2. 休校の体験から学ぶべきこと

休校は、学校が十分に機能しなかったらど

うなるかを考えるうえで、とても大きな教訓を残してくれました。このような結果から、私たちは何を学ぶべきでしょうか。それは、次のようなことではないかと考えます。

①学校は、多くの生徒に平等に学習機会を提供する重要な機能を持っています。休校中に多くの学校は宿題を課しましたが、それでも図3-1に示したように「出なかった」から「4時間以上」まで分散がありました。宿題以外の家庭学習は、さらに生徒による違いが大きいのと考えられます。平日5時間（50分×6コマ）の授業があることは、そうした違いを相対的に縮小します。平等化は学校の機能として当たり前と思えるかもしれませんが、強く認識しておきたいところです。

②とはいえ、学校によって休校中の対応が異なっていて、それによって生徒の学びに違いが生まれたことも指摘せざるを得ません。危機的な状況が出現したとき、柔軟に対応できた学校とできなかった学校があったと考えられます。この学校格差の問題は、本調査では公立学校と私立・国立学校の間で鮮明に表れていました。特に、ICTメディアを利用する映像授業、オンライン授業のような新しい取り組みの実施率が大きく違います。公立学校には多様な家庭背景の生徒が在籍しており、一斉にICTメディアを活用することが難しかったと考えます。2021年からGIGAスクール構想に基づき、すべての小・中学生に1人1台の端末が配布されました。これにより端末が利用しやすい環境にはなりましたが、メディアの活用には端末があればよいというわけではありません。教室や家庭のネットワーク整備、情報セキュリティの強化、学習コンテンツの準備、教員のスキルアップ、支援員などの人材確保、生徒の情報リテラシーの獲得など、考慮しなければならないことは多く、行政の役割も大きいと考えられます。学校間の格差を生まないように、資源

(人や予算、教員が教材研究する時間など)の投下が求められます。

③ 3つめは、学力が低い層への配慮の必要です。休校中の課題に対して「理解できた」という回答や、学習指導について「満足できるものだった」と評価する割合は、成績下位層ほど低い傾向がありました。休校期間中に理解できなかった内容がそのまま放置されると、その後の学習にもマイナスです。**休校中や休校後は、成績下位層により手厚い支援が必要**になります。

④ 4つめは、家庭による教育格差の問題です。家庭学習は、社会経済的地位（SES）が高い家庭の生徒ほど積極的に取り組む傾向があります。それは、休校ではない通常するときにも表れます。しかし、**休校で学校の平等化機能が働かなくなると、家庭の差がそのまま生徒の学びの格差につながる**ことが懸念さ

れます。これを是正するのは、相当に困難です。学校ができることは、生徒や保護者に家庭学習の重要性をしっかりと伝えること、家庭学習の仕方を指導したり、そのための学習ツールを準備したりすることです。また、宿題をやってこない生徒には、家庭の学習環境が整っていない可能性に配慮する必要があります。教員には、通常するときにも増してきめ細やかな支援が求められるでしょう。保護者の役割も重要です。保護者は、家庭学習の大切さを再認識し、可能な範囲で学習できる環境を整えたり、不足する体験を補ったりする必要があります。

コロナ禍の状況では、さまざまな学びの機会が不足しがちです。保護者、学校、行政がそれぞれ自分にできることは何かを考えて、生徒の学びを支えていかなければならないと考えます。

【注】

- 1) 調査では、実際に学校の宿題をした時間（第2章で解説）についての質問と学校から出された宿題の量（本章で解説）についての質問を別になぞめている。
- 2) 農林水産省がまとめた資料（47都道府県の休業要請等及び休業要請等に関する主な支援策の内容、2020年6月23日時点のまとめ）を参照。
- 3) 木村（2020a）は、本調査の通常期の調査（「子どもの生活と学びに関する親子調査」のベースサーベイ）を用いて、学習意識や行動と学業成績に相関があることを示している。
- 4) たとえば、武内（1981）、樋田ほか（2000、2014）など。

【参考文献】

- ベネッセ教育総合研究所，2013，『第2回放課後の生活時間調査』。
- 樋田大二郎・荻谷剛彦・堀健志・大多和直樹，2014，『現代高校生の学習と進路』学事出版。
- 樋田大二郎・耳塚寛明・岩木秀夫・荻谷剛彦，2000，『高校生文化と進路形成の変容』学事出版。
- 木村治生，2020a，「子どもの学習に関する意識と行動—学年による違いに着目して」東京大学社会科学研究所・ベネッセ教育総合研究所（編）『子どもの学びと成長を追う—2万組の親子パネル調査から』勁草書房，55-74。
- 木村治生，2020b，「社会経済的地位が教育意識・行動と進路に与える影響—進学した高校の偏差値を規定する要因の検討をもとに」東京大学社会科学研究所・ベネッセ教育総合研究所（編）『子どもの学びと成長を追う—2万組の親子パネル調査から』勁草書房，279-301。
- 木村治生，2021，「コロナ禍における中学生の学習—休校は家庭環境による教育格差を広げたか」『チャイルドサイエンス』21，13-18。
(<https://kodomogakkai.jp/03/21.html>)。
- 文部科学省，2020，『新型コロナウイルス感染症の影響を踏まえた公立学校における学習指導等に関する状況について』。
- 武内清，1981，「高校における学校格差文化」『教育社会学研究』36，137-144。